837
34
48

和訓栞

芙之部

十三

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』 請求記号 837-48

ガラス使用

837-48

京圖書印

帝國圖書館藏

帝山文庫

倭訓栞前編三十

美の部

洞津　谷川士清　纂

根岸信蔵氏寄贈

昭和八・六

陰神の称よ多くもろ〳〵伊弉冊（いざなみ）尊法那美（ほなみ）頭那美神魯美の類是也

よもつくに本紀よこそうつそみよるくしき

産霊の如し皇ハ大也とこそもろ〇

の略也〇真をみ〳〵いふ例多し三

そふるみるくのみハ尽の法を秋のほ

小鳥くゝてふ〳〵その約言也〇ふちみ

の末をたゝふる詞也りこゝろもろ〳〵ぞもろかるく

もあうの条をあ友ますてまり友みも上の像も其心得ふく〳〵也〇ふ

水の条よかふかよふ西土と同し古事記よゝゝゝゝとゝあさハ発語

也體躬ふゝと同し他よ対し己を身〳〵又身ぐゝといふ豊前豊

後よ月が等我等ゝゝとらあり〇実ハ身よ同し子をとあり〇私記よ鞋

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48

ガラス使用

訓栞くさ也実の条也説文に雜ハ草木實雜々也とこゝえたり○我ヶ国
こしの事晋の時よりこゝえそめし世説かくも多し○箱の底をいふを
身の条なるへし○古事記に見えたり見畏見驚見喜見感かく見とつけて
いふハ古語也○倭名抄に猫とよめり今みぐぬきといふ是也新撰字鏡に
ハ狢とよめり本草にも貍權貉三種大抵相類くさ○又貙を訓せり
貙獌也と注せり今みちのく東國よくき兎くらふ○巳ハ十二支の名
蛇をへゝこといふ其略也○箕ハ皮殻をひろく實のこぼる器ありまく名なり
へ一新撰字鏡にハ簸とよめり○二いろ見ハみる臣ハ形を績ハうみ水ハ
こゞの略也○名ハ相をよむハ藤原相如のみの条也○尾をみの音とハ
万葉集にこえそめし微味の例也呉音成へ

△みこともち　賀茂の祭よりもち御生ともこえ或ハ御霊をよめり
みあれの日ともあまくこえそめしハ賀茂のみにもあり
こゝなかつ今日の日吉ハ祭ともいへり
申の日ハ日吉祭にて同日賀茂の祭の後ハ此日をみあれとまで西ハ

そのみあれをいそふあやひ祭の後ハ○風雅集にみあれ木とゆふまで
かけしともこえそめし○みあれ山みあれ野賀茂よりハ○みあれ
ともいへりまつり賀茂保憲女集にて日をもみはそとそひくとみえ
みあれ　神代紀ハ饗をよめりみはきんて称せる也古事記ハ天御饗と
をこゆ

みあれ　日本紀ハ殿をよめり御在所也みあれくさとこえ万葉集ハ
御在香くもり古事記ハ御舎をよみ古語拾遺ハ造殿忌部所居謂之
鹿香古語正殿謂之鹿香しいふ祝詞式ハ御殿守こゆ

みそなす　神代紀ハ合交をよめり身合の条也婚をみあひともよめり
同く古事記ハ目合くもり

みあかし　日本紀ハ燃燈をよめり佛家よりハ倭名抄ハ燈明をもみ
あかしと訓せり

みあるじ　日本紀ハ苗裔跡等かとをよめり御名末の条名をあ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

ふるくさみの古語也

みあばしら　穂火祭祝詞よ見阿波多志給ひてゆあかく意荒ぶる事也又不見ども○按ふるくさみの人松草紙よみちぎきまめらせたまふ

直身命　とよゆ俗よ命を宝の字といふ是也又音もあり

△みうら　古語拾遺よ二季御トよ即御体御トよ也亀トして玉体よ八十九まで孫ふるくさみの人松草紙よみちぎきまめらせたまふ

御つ生ころんこと成うるん奏よる也○三浦ハ相摸の郡名也三浦大介義明ハ平姓也八十九まで孫ふるくさみの人松草紙よみちぎきまめらせたまふ

八十九まで孫ふるくさみの人松草紙よみちぎきまめらせたまふ

みうちぎ　源氏よゆみうちぎの人松草紙よみちぎきまめらせたまふ

て日中行事よ御手水の間ふそみうちぎ人めをとふえそうよ花鳥よ蔵人私記よ御髪(みぐし)事侍臣之間撰堪事之人供(ス)无定例皆着當色袍謂之御

往ふ今按阿もくまはひんよまわる人ハ笠のきぬ社直衣をきそて伺候をるをはうちきの人くらゐ也ふえるくらゐ古語のまよる也

みうセぬ　日本紀よ薨をよめり身生ぬの義也選却崇神祝詞よ立處よ身亡ふよふえるよう

△みえぬ　見をらふえぬ反ゆ也又不見ども○ふえハ万葉よ所見ゆまわる人ハ笠のきぬ社直衣をきそて伺候をるをはうちきの人くらゐ也ふえるくらゐ古語のまよる也

よめり○羽州よそえぬをふえぬ反ゆ也又不見ども○ふえハ万葉よ所見ゆまわる人ハ笠のきぬ社直衣をきそて伺候をるをはうちきの人くらゐ也ふえるくらゐ古語のまよる也

みえがくれ　古今集よよめり今ふ

△くを　古事記よ坂之御尾とみゆみハ歳語み称のみと同しくみハ真よ同水尾と書ハ水のふうそ不也又水脈(ミヲ)をよめり延喜式宣命よ水脈を教導賜へく宣ふとよえそうよ俗よみくよ見也○雲のくを雲のくをるくらゐ范大成詩よ肯作山腰水尾来とよえそうよ俗國言る嶋郡水尾村よ水尾神社あり神名帳頭注よ南水尾ハ猿田彦命河内社ともしみ河北ハ天鈿女命也両社水尾川を隔てうよえそうよ俗よみをくよ見也○雲のくをるくらゐ范大成詩よ肯作山腰水尾来とよえそうよ俗よみくよ見也○雲のくを

日本紀よ進食(ヲシ)をよめり御食物の義也言事記よ食(ヲシ)御飯(イヒ)をみを

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

〜まるとよめり

みをつくし　澪標をよめり万葉集は水脈衝石ともかけるへし心消〻〻水脈の義なるへし尺すを詑と云ふ物也くいは延喜式は難波津頭海中に立澪標とこえたり土佐日記はみとせるくいのりくいは出くいといふ是也万葉集は遠江をとよめり引佐細江のみをつくしとよめる入江也○澪は水雫二合ともいふこれ古今集をかそへ世人身を知るとよみ給ふと頭昭也万伊勢集は

かくみをも身を知るあめしかれとも人は君もうしかたまつり

みをつくし　大神宮式は三節祭とこえたり六月月次祭九月神嘗祭十二月月次祭これ外宮は十六日内宮は十七日也俗は三祭礼ともいふ

みをつくし　建武年中行事は北山抄は甘糟也甲青竜盃不給臣下とこえ一昏は甘糟三杯一杯糯米一杯黒米一杯白米とこえたり延喜式は醞酒汝や乎とこえたり如一三節酒は白米黒米糯米にて造る大同の記は正月者三節豊楽聞食とこえたり○三節會は元日白馬踏歌也

みをつくし　水尾速くるともよめり万葉集は堀江よりみをびてふねとよめり水をおみくだるとも先小船ゆく水の流てふねとむりゆくの意也くいは

みとびくいの事　和名抄は水脈船道とよめり万葉集は澪引とも記せり

澪をあらうともいふ也延喜式は船到縁海國澪引令知泊處とも記せり

〈みを〉　日本紀は竇とよみ新撰字鏡は覚とも蚯ともよめり文の字の如くかかめたる穴〻〻釋名は上古物の大なるをみかくらは竇栗も巌星巌栗もみな其穴の如くかかめたる也とこえたり一説は竇星も竇栗も巌星巌栗のきはみてみくらは相通ふともいへり○延喜式は脹字とよめり脹の誤字なるへし倭名抄は

こゝろう稲也〇みうのうたゝへなるへし〇祝詞式に竈上高知竈腹満並とせへし〇竈をかまゝ古へ酒と醸たる脹るかう神よさる物てかくゝ云て

みかぐ　御門と書り陛下關下かくらみな如し〇日本紀に人主王室天闕國家朝廷日本國中國ともよめり〇古事記に神朝廷ゝゝ沙神宮とさせり〇御門祭ありこれ禁門とらみよて四方内外御門ゝ祝詞にも名内に中重の諸門外に宮城の諸門也〇万葉集に

みかど　國の名にらふ男川豊川矢作川の三大河めるとりて也ゝゝて〇御川池に外宮神前の川也支木集にこと〳〵生れみうに此のあやめをゝゝいる是ゝ

〇藤輔家集源氏拾草紙にこゝえ禁秘抄に御厠人とあたまるに不浄を生好の絹二幅と縫〳〵あの端と結合て代礼とひちにかけおる女也とらう〳〵俗不浄の箱とれうへとらふ此条多し〳〵

みうゝ　同仇の五字にらふ御方〳〵ゝ吉事記にらう身方とも此後世の羊方なるへし〳〵西土に同人とらう魔字をよめるに心得ゝゝ〇材木にみうゝとらふに身方の家日のあゝゝをかてゝに対せり〇持統天皇の時に諸国に令て水のほゝうねる方るとに木おりそとを彼神之象とゝも鏡を指てらう也神道に像をゝゝとゝゝ延喜式年よ國ゝ諸社に神像を入ゝまゝ〳〵ゝ半あり當時たまゝ神像あるに多くい大永享禄の細工ゝゝえ唐風の冠装束とゝも丹後國与謝郡枳列神社をゝ板並山よありさまい列をるゝ訓をゝ〳〵今男山よまゝて八幡神とす神像ありて嚴崇く尊むゝ〳〵又月神の御像の羊禁河の谷よゝえ三輪の御供所に三神の像ありてるく古像也とらう三代實録に大名持少彦名の石像の羊ゝえゝ〇新撰字鏡に佛をみうゝとゝめて御像の装るへし〳〵〇みうゝ原ハ遠州也

みうや　出雲國造神賀詞に天膳和に齋(イン)ごりてとゝも和ハ万葉集にもの音よゝめまゝとみうゝ屋の家上文の伊豆ゝ真屋(ヤ)に對〳〵らふるゝ〳〵みかるゝとゝみて神酒をみうとゝむ意とせる説ハ心得ゝゝ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

みかがび　出雲國造神賀詞ヨ天ノ美賀祁理（カヒカムリ）テ
ぶり反ビ也

みかげ　日本紀ヨ靈字ヲヨメリ中臣祓辞ヨ天御蔭日御蔭ト云ヘリ
蔭ハ御門ノ上ニヲヒ諺又常ヨ御蔭ヲ蒙ルナドヲ是也古今集ヨ
つくづくものこれもかのことよかけはなれ
まゝと君うとかけよまゝ
〇延喜式ヨ御鬮ヲみかげと訓セリ〇儀式帳ヨ御船神社一處称大神御蔭川
神ト云ヘリ〇山城御蔭社ハ天御蔭日御蔭ヲ合ルトナリ加茂神神事
ニうかゝ祭ヲ云ヒ又御生山ト名ケ又二葉山ト名ク〇
持統紀ヨ以幸（カウ）二緩進（クワンシン）一于殯宮（モガリノミヤ）一此日御蔭ト云ヘリ〇御影ノ義モ同ク依頼
ル心ヨテ名ケシナルベシヨ
みらみかげよあそまゝ〜ふもみかげよあそまゝ〜この歌
みらハ此我日本ノ称ヲリ川みうけ石ハ摂津國也方角却テ違
みらくの下ヨ詳ヨト〇みうけの杜みうけ川みうけ石ハ摂津國也方角却テ違
の松原の内といふり〇暁筆記ヨ延喜帝の御宇御夢想の告ヨよりて延喜三
年七月ヨ八日ヨ八丸靈ヲ内裏ヨ遷シ竹の墓ヨ祭ル〜ヒリ今のみかげの
森の社是也ト云ヘリ

みらづき　三日月の義ヨ万葉集ヨ或ハ若月ヲヨメリ又三日月の
眉根ヲヨメルハ唐詩ヨ蛾眉山月半輪秋トイヘル如シ〜郷飲酒ノ月三日
成暁ト云ヘリ〇馬ヨ乗ノ法モ此名アリ〇和名抄肥前國小城郡ヨ巍（ワカ）調
ノ里（ワカ）〇東鑑ヨ若月庄（ワカ）アリ信濃水内郡也

みぐくし　水ぐきの義万葉集ヨ多クヨメリ〇俊頼ノ子ヨ玉ぐし
ヨ
ヨみぐしヲ以テヨメル歌ハ浄キヲ専ヨ云ヘル意ヨテ源氏ヨ対ノ上ヲ
ヨみぐしニ六帖ヨモ月数ヨみぐしヨリトヨメリ〇ヨヨ顕注ヨモ霊
奇ヨ依頼ヲヨリ前ノ詞ヲ考ヘ落ラレタルニヤ
さて依頼ノ子ハ齊宮ノ内侍ヨ相具シテ伊勢ヨ下リ時六條修理大夫
ノ許ヘヨル事ヨ宜乃捧持太玉串ヲ大中臣隠侍ヨトヨヘル
ヨル意也

みらまぎ　御薪トヨリ正月十五日百官悪薪ヲ大内ヨヨル
御竈木ノ義天武天皇ヨ始ル

百官の百の官の御薪を民のかぶらしむる
みづかみづ　源氏古今集ふるとしにそへてぞ
ありし禁海ととゝえたり孫叔向詩に一道泉流統御溝〇御川池八齋宮
式にゆえ長説に豊受の御前を流通る川なり今八あせくり御池とふ
ふるく夫木集に女御徽子女王の詠にみかの池乃菖蒲草とよみたる
まくる是也
みかきもり　御垣守也衛門の衆にて衛士をもふ神代紀に不離二
天皇宮瞻之傍一ともよめる是也衛士のたく火の宮衛令に其宮門皆令衛士
炬火とある衛士八軍團の中軍事をふるふせ是を兵士とふ其兵士
の中より京にて衛士とふひ太宰府へ典遣さるを防人とふり
〇能宣の御垣守の歌を腦のまえつく思ひよる心きを俤つくよる夜
ともふくふ也ふるを宮門よ衛士の焼火と喩ふれ夜のまえつく衛の消
つゝとふふるり第三一本よ秋かりえてとあるい誤也此てよをはをふ
のえつくしるい消つゝとふへきをとよひてよへと通いまゝ例

也後撰集に
かゝるおもひありとも世をおもひおきて身い消ぬる雲ともがな
第三句以下見よ例くてみを生て別也ふるふ
みかんなぎ　御巫とも又かんこともよめり神を齋きまつる女なそ男の
祝よ同し今此神なの額ふあるを昔い大御巫生嶋御巫坐摩御巫御門御
巫ふとふり今八絶ぬ
みうまやま　三笠山也大和春日よふり〇神護慶雲二年よ鹿嶋香取大神
三笠山よ宮造りして遷しまつるとふ記よ此年備ふり〇大中女将の美名ふとよめり堤中納言相中
将より中納言よりて賭弓の世りにくしとふ日ふるくさのみうきの山いふ引けるを
とよめるよりの事ふ狭松よふそふり〇檜垣家集よ筑前のふとふみあさの
みうらごみ　古事記よ見長とふ名見て驚き思ふくとふ
みうらごもり　源氏よ沙倭名抄よ圖人をよめり字門者と注を侍中群要

よ御門守ゝもり衛門府の下よ属ゐる門部の戒是也
みかどまつり　式よ御門祭ゐり荒ぶる物の入ぬゝ人を防ぐむゝそゐふ也中古まてい毎年六月十二月よ大殿祭御門祭ゐり今大嘗會よありてゐる居をまつるゐり
みうどまもり　日本紀よ朝參をゝもあり
みゝどごろを　日本紀よ朝服をゝもあり
みうどのゝみ　古事記よ天石戸別神亦名謂櫛石窓神一亦名謂豊石窓神此神者御門之神とゝもゐ舊事記よ天太玉命之子也とゝゐり國史眞觀中阿波國天石戸和氣八倉比賣神又大和國高市郡天津石戸別神社丹波國多紀郡石窓神社二座とゝそゝゐり櫛ハ奇の字和魂也豊ハ廣大の字荒魂也よて祈年祭祝詞ゝと此二神名を擧ぬ
みゝのよのゝとゐひ　後拾遺集よみゝの字のゝもひいゝゝゝと讀ゐハ誤礼後三箇夜の餅の事を二月二日の艾縒よ也ゐる也源氏ゝをゝて取よ壻娶の三日ゐゐゐ夜餅を松ゝよ盛事よゝゐり又ゝゐご餅のゐよゝそゝゐり

△みき　古事記の字よゝゆゐりて酒を通ゝてゐふ今神酒をゐゐりみゝ御也きハいゝきの略轉ゐつゝ名ゐるまハ酒をゐふ也琉球よて酒をみきゝとゐふも我邦よゐり伝へゐる語よゐる歟ゝゝ〇今造酒を訓を大神宮式よ清酒酒造ゝ並へゐり清酒ハ白御酒也酒造ハ黒御料酒作請ゝゝそゝゐる◎幹をゝむハ身木の字也〇日本紀よ棺をゝもあり見も身木也人木ゝゐふ如ゝ
〇古語拾遺よ其採材忌部所居謂之御木ゝゝ紀伊國名草郡也〇三木城ハ播州よ在
みぎり　右をゐふ南面の正位をゐゐりて西よ向ゝゐまゐる日の入を見浪るゐゐりゝゐり〇砌をゝもあハりゝ石垣をゐむことゐる水限のゐゐる之ゝゐ雨雷の落る簷下の砌よゐゐまハ水限のゐゐる之ゝゐ
兼名苑よ一名階ゝそゝゐ
みぎハ　汀をゝもあり水際のゐゐりゝゐふ如く汀勝のゐ歟ゝゝ
きハゝゝゐり
みぎハまゐり　源氏よゐゐも今も水際のゐりゝゐふ如く汀勝のゐ歟ゝゝ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

君ともる涙おちそふ代川のみきいまさらめてたりみつぐり

△みぐし　神代紀ニ首字髪字をよめり髪を御髪の字もよめり奇霊を称せる歟ヘー○神代巻抄ニ男子ハ髪を後ろニ垂其結ひ様みつらのごとく角のごとく女子ハ逆髪ニ分て額ニ一ツニ結ひて梯をきりて後ろニ垂ともに今と女の髪結ふ云ハ其遺法也○中古の呑ニ髪をおほんぐしともみくしげともいふ

みくさ　水草をいふ也○祓の幣霊をいふ身草の条也○秋の野にみくさかりふきしき万葉集にもある詞なり仙覚抄ニ草ハ凡て信濃と云ハ科野の字を用ひ来れりと云へり大嘗會式ニ倉つくる云ハ科野の木を用ひすきの字ハ漏ると云へり○三草山ハ丹波國氷上郡と盛衰記ニもみえたり○三草ハ代物四十裏飾ニ以美草ニもみえたり○三草山ハ丹波國氷上郡と盛衰記ニもみえたり○其東麓を撰州苑原能勢と連亘せり源義経一谷の戦ニ三草ニ陣せり

みくりや　御厨をよめり内膳式ニ吉野御厨志摩國御厨の類也儀式帳ニ

段神戸名号御厨即号太神宮司ニより頼朝卿内外宮御厨寄進の状ニ寄進伊勢皇大神宮御厨壹處在武藏國飯倉ニハ内宮一祢宜荒木田成長方ヘ遣ハさる寄進伊勢太神宮御厨壹處在安房國東條書賀次郎太夫生倫ニ賜りるニハ外宮也外宮ニよ皇宇ふし白居易ニ詩ニ珍差降御厨ニとえたり御贄をとる一所をもらひ也大明會典ニ神厨の字ニえたり御供所ともふ是也越後國美久理神社式ニもみえたり○倭名抄ニ三稜草を訓せり新撰字鏡ニも苅をよめり今伏見みくりきやうと云ふ所ニ称名寺の古墓ニ中村ニ遍照寺の西屋の御簾ニみくりの苅物ニて作りたり苅物ニハ苅草紙ニみくりのそともえたり○貞観儀式ニ御匣殿ニとえたり天子の御服を用ふる所也其女房の上臈を引摂ニ云ふ○みぐしおろし　伊勢物語ニ皇后ニ御髪おろしニよる同し落髪落髪の謂也惟喬惟仁の御位あらそひニ後の流云々虎ニ相

撲と心得うるくは三代實錄又つへ〳〵又雉喬親王の東寺の悉曇をふるく
ゑてうひ〳〵ふるを物ふるへうるの
〇みけ　御饌又御食とも書儀式帳ふ朝乃大御饌夕乃大御饌中臣壽詞ふ
長御膳の遠御膳とくへうるの日本紀ふ粟をうみ神食をもちゐ儀式帳ふ
奈保良比御歌ふ

きくくしろ五十鈴乃ふよ御氣ふとおろひざ宮もそろふ

と唱るみけも同ものや〇又儀式帳ふ御饌致をえゆ〇節會ふ晴御膳と
いふ酢塩酒醬餽飩索餅餲餬桂心也殘御膳くいふ雜子黏臍餲餬團
喜也まく晴御膳とらふ内膳司ふ高橋ふ献ふ膳御膳ふ高橋ふ献ふ膳
乃〇外宮ふ御饌殿ゐふ二所大神宮ふ朝夕の御饌を供進るの御殿也を
と内宮の御饌も外宮ふの朝夕齋運ひりふ聖武天皇の御宇ふ遠中臣
ふもゝ〳〵事ゐりて御祭ゐりふ御饌殿を造立あり
て内宮ふ運ふ事を掌めゝゝふ〇内宮ふ御饌を炊ふ忌火屋殿ふ
忌火屋殿ふ

みけ〳〵　日本紀ふ衣裳万葉集ふ御衣をゝめりけ〳〵友き也着の名
也同ふ君ゐけなくゝもむい着る也〇明衣をゝめり〇一條院の宇治
ふ御衣を脱〳〵民安ら〳〵事を祈ふ名たまふ李部王記貞信公故事
ゐりて御製

みけつくゝふ　万葉集ふ御食國とゝゆ御饌津國も同〳〵つこふあるゝ
大御食の御贄なるゆをゝてゝふりとて伊勢志摩淡路難波ふゝつけ
ふ御けつゆ日ゝ供御調ゝふる是也食國を治ゝるむい別義也

〇みこ　皇子親王をゝめり御子の名也親王ゐ号い天武帝ふ始る人〳〵い皇
子ふう六代ゐまゝ嫡子を親王ゝゝゝ〇伊勢物語ふ氏の中ふ御子生
まゝふゝ〳〵ふふ行平卿の女更衣文子負數親王を生まゝふゝ後
いふ負親十六年也清和のみく也〇法親王ふ白河帝の皇子仁和寺乃覚
行ふ初ふ親王宣下ありて後ふ得度あるを法親王ゝふの出家信親
王号を受たまふを入道親王ゝふ〇皇女の親王宣下ふ桓武天皇

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

の妹よ海人内親王始也と○神代紀よ亂をよめるも御子の事也○神子
をよめる巫女をいふよ也祝詞式よ巫をかんなぎと
いへり其略也楚辭注よ楚人名巫爲靈子猶言神之子也とみえたる同意也○俗
語みこ〳〵も此等也○平判官廉頼の筑後へそうまをたるよを神なしにせよ
覺禪房榮尊是也○法興院の関白大よ信せる御卜の神なしにせよの大臣
よみえたり此ふたつの下巻人名にて皆みこ〳〵訓べし
みこと
神代紀よ至貴を尊とせり自餘を命とせり皆みこ〳〵訓べ
しそもそも神ろみこと父のみこと母のみこと
のみこと好のみこと〳〵みこと是いと上下通じてそのみこと用ねるを
へし古事記よ尊命のとかゝる皆神賀詞よ白命とよみえ
えぬ又天皇命とかゝるよ續日本紀宣命よみえて万葉集日並斯皇子尊
爲市皇子尊と此例也とかゝる後世おとしめて
ともかく言事記よ請天神之命とそゆ又天神詔命以とかゝるよ
以と多くよみえ却崇神詔よ天津神能御言以底とみかし御言の幸みを

のうるとかゝり
みこと
神奥とかゝよ宋史禮志よ遷廟禮儀史奉神櫝行とみえたり
新勅撰集よ
足引のいくへ山の日かけ草かきやみこと〳〵かくこそ
○仁壽殿御神天皇の御櫝建保二年の災よりて
天子よ鳳輦とかゝよ形ありて神櫝の如し舉行を櫝とかゝり輦
行と輦とかゝり○みこと岡よ北野の西南よりつゞきて
野行幸の後撰集よ
みこと岡高きの世よ年とへてふりぬれみゆきをぞまつ
かまくらよみこと〳〵の時よ萬葉集よりあり仏よ今の腰越也とかゝり又安
よ稲村の時よ云々
みこと〳〵ろ成
せとかくきこと心ありとかゝり
みことのり
水分をよめる古事記よみくまりとよみて訓分久麻利と

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

ことよう水くくりの祈せる詞みくく水分神八其徳を称せる也古歌な
みこもり神よりへてきこしをすくあく魚何のほくみかは
○みこりぬるくらみ水源の義也○万葉集にみよし野水分ふとよめ
るハ文武紀よりみ吉野水分峯神也式よりハ水分みよませ〳〵を今卅
治村を堅ことよめる葉也

神さみ盤根くりしき三芳野の水分山ともいふべし

みくまりを訛て御子守の神ともいへり〳〵六帖抄にかくかゝれたり
こりつゝこゝろせまくせ山邊郡都祁水分神社式よる名蘇田村よ都介山なり
葛上郡増村よみこりくと云所あり祈年祭祝詞よ水分坐皇神等能前
永日よ吉野宇陀都祁葛木宮御名者白氏くよ也又宇陀郡よ宇太水分神
社式よ高見よりあり平せ村よりよ嶺頂よ至る五十町くらの建水分神
社い河内國石川郡水分村よあり北山抄よ臨時大事よ為詔詩常小事
みこ〳〵のり　詔勅とよめり即宣命の意式の祝詞よ天津神能御言以
立ことよめり神代紀よ教ことよめり

為勅ことよめり御言宣の義也続日本紀よ天皇詔旨今勅御事法者〳〵
とよめる中臣祓よ宣別ことゝもゝ
ことゝのち　日本紀よ宰宇司宇るくをよめり御言持の義命よ含
んで天朝よりまふすをいふ也万葉集よ君よ御言持かよりくとよめり
みらのこや　古今集よ日本紀よ東宮をよめり○倭名抄よ春宮坊
をよみこのこやつかさとよめり又主殿署みこめやのむきれつかさとよめ
△みさき　日本紀よ碕宇岬宇るくよめり共に美佐岐と訓り○倭名抄よ
汀をもよめり水先のみさきや○大神宮式よ鹽焼をみさきと訓り○
書紀よ嶋曲俗曰美佐祁とよめり

みさと　日本紀よ京師をよめり又みやさと訓り宮里のみやこしい
ふ如し○京師よ一條より九條の制ありて周礼の都城方九里國中九経
九緯ことなるよ起りて拾芥抄よ條起従北行於南里起従西行於東と云
海東諸國記よ元明天皇七年始定京城條里坊門とみゆ三代實録よ十一條
十二條等の称あり九條よ限ることあるにや

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

みさと　操をよめり後拾遺集に哀かなる竿よまたり躬竿の哀しく
操行の直立せるをいふまやとしつり荘子に津人操弁若神といへるよりて
水棹よりおこるまや千字文なる節義の字を訓し霊異記に風聲又氣調
をよみ日本紀に孝とよめり○水竿ともいふ詞又手棹ともいふ○哀ふ
らくも身竿の哀今身よけふるくしらなみやと也本曽のみさとをよめる
花をよまくのごがかする意也松の操くしらなみも雪霜をもそまく常盤なるをよそ
後拾遺集
あるうえよめるかくふるくる哀みさやとしらそうたうき
みさろ　大坂の哀藤白のみさろ信濃のみさろくをよめる
しつり万葉集に神のみさろくとえゆ
みさけ　万葉集に見放くもりさけるをよめる
みさろり　神代紀に方とよめり正盛の字成へしむろよとよそいへるやさしくる詞なるへし
みさき　日本紀に陵又山陵をよめり御狭く城の哀なるへし狭く城山の

事顕宗紀によそ墓よ城くらふ事漢書にてか○南都元明天皇の陵邊
七定の石狐にて其所以を知人なし或ハ狗人るへしくくくくしりて今四箇ハ谷よ
落しか○大和よ諸陵多くく皆南面也たく吉野後醍醐天皇の陵のみ北面也と
しつり遺勅のよし太平記によそしかり塔の尾の陵よ如意輪寺の堂のくしろよ
まくせり○宇多帝以来ハ山陵と置よ遺勅よりてく○倭名抄よ諸
陵寮をみさきめつかさとよめり○神代三陵ハ帝都東よ遷しくより山城
葛野郡田邑陵南原よ遥拝の地と定て祀をなす式よ兆域四方一町のくくよ
今桑室山の南廣野の陵村よ其墟存を神武天皇以下の山陵と其霊代祭給
ふ藤原吉野の奏言よ山陵猶宗廟也縦兆宗廟臣子何慮仰是を以てえよハ
代くく人主山陵の外別の霊祠ふりくよ故おかて祠あるハ則の半りくて後世の
典教といふり
みさふらひ　御侍也古今集陸奥ふりよ
みさふらひみかきもりくせ宮城野のこれとよめるまやまや
是ハ素にりて按察使節度使國司なと任よ下向の時多賀城よ入て國府寺よそ

食應の日先白山の宮詣の式ありて文武百官の奉幣を次ぎ諸の司より告る辞也むかし国府寺より公人沙汰待の祝官千人より及てかしこまれる名よ本の下もろ〳〵ら

みさごづく　和名抄よ京職をよめり左右ふり朱雀大路以東京極まてを左京ふて洛陽よ擬へ朱雀大路以西を右京ふ〳〵長安よ擬へて東京西京の名と起もの

△みちのく　萬葉集よ水陸ともよめる水のふかき浅らず田よおりたつ也ふ〳〵

ふるまや玉吟よ

行山のやまのふもとの苅田をおかへし書ともやゆきみ〳〵ぶらん

みちのく　御修法の音也圓登よ始る正月よ禁中よ行ふ也ふ〳〵真言院よて行ふ也ふ〳〵今の其院ふ流るをとりて紫震殿を用ふる埃囊抄よ元日より七日まて神事多ふよより出家参内せず八日より始る御修法ふれ共是を後七日ふ〳〵ふ源氏よみをふ〳〵ふえふり待中群要よ弘仁経法尊皇王法熾盛光法金剛童子法大元法北斗法安鎮

國家法請雨経法不動法降三世法軍荼利法大威徳法金剛夜叉法尊勝法薬衣観音法ふ〳〵ふえふり〇御塩殿ハ伊勢二見浦よある社也長明ふ〳〵ふかく神ふひたてるみちかとの義千世みちぬ松ふりふて

みしま　摂津伊豫伊豆ふ〳〵ふり明神ま〳〵摂津ハ神代ふふえ伊豫ハ越智郡の名也大山祇神を多り伊豆ハ伊豫ふ遷をふ〳〵て摂津國嶋上郡三嶋鴨神社三嶋江村よあり〇三嶋暦ハ伊豆より出を初ふ〳〵〇茶碗ふ三嶋をふ〳〵ふかふ堅よかふ紀ありて三嶋暦よ似ふ名を始ふ〳〵高麗の品也

みごかし　短とよめり多くかくまると万葉集東手よみぢかきとふふり分迄ハ笑ふべふと布能未知可久氏ふふふ而已近くての義也ふ〳〵証ふふ入ふ〳〵

みしてセ　日本紀よ粛慎とよめり後漢よ挹婁ふひ唐よ靺鞨と〳〵ふ〳〵ふ宋よ女真ふひ元明よ女直ふいふ皆一也西北朝鮮の東北よおふかた其末蝦夷の地よ接をふふり坪碑よ去靺鞨國界三千里ふえり

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

〈みす　簾とふ御簀の義也或ハ翠簾ともいふ物まそすけよりえらう〇みすまきあけよと源氏ふ香爐峯雪撥簾看らふ意也といつう〇御巣らふまき言事記よゐ玉座とふとて神宮まて相殿の美須ゐらふ〇見をの義あり万葉集よ吾大王の所聞見為背皮の圖又見之賜みらえらう

みをまゐ　神代紀の欽よ見ゆ御統とよめる是也そて大きめみをきるいふもつて語通ふ簾疏ふ以絲貫穿總括之也とえゆ

みをとらう　皆禮の始めまた方よふ文献みかけ艶書と通りて後よ翌簾入ふて夫方よふ婦の方へ通ふ是日本の風俗也其言言事神武記日本紀仁徳紀履仲紀ふくにえらえうそて舊記よめ入の式と載る事ゐ〇姫宮の御入輿の時みを入るふ〜摂家へ御入輿の時ハ姫宮の方へ行て御所よ一宿ありて翌朝退出ふて是を御簾入ふら其後姫宮御入輿ふら事也〇戸令よ凡男年十五女年十三以上聽婚嫁ふえらうまでふ漢土よ同〜〜す

みをぐさ　万葉集よ水鶏ゐ水鶏知ふもの真鶏の事ふきふら倭へ神代紀よ野鶏ふえらう今の水鳥信濃よ住ふ小ふ後世の称よ信濃ふ穂屋のをきゐしよめる意ふや鶏ハ鶏と通りてもて竹の半ふうふ野をずふらハはふるりふ又よれら語意ふふ〜野ハふうふ野をずふらハはふるりふ又鷭ハ鷺の誤也篇海よ鷺黒竹也とええゆえふ

みをとりを　伊勢物語よみをとあり人とえゆえふおふ〜ふえつふも水くゐ放ふいふ〜真名よ見為毛不有見嘗不為人とふりまふハ見為ふふ方架集よ据とふ色するてともふくすゑすてよもへ〜

みをのみつひ　加茂祭の日簾よ為ふあふひをふら菜雅々の事よふふらへをふふふりあつひをゆ文ともまゐえて考利

〈みセ　日本紀よセとみセ〜訓を綿二斤也〇貨財の店をふみを人よ貸物と令見の義也舗面ともふ廛ともふ庭訓よセ棚ともえゆよて

又なかともいつり○みセ川ハ伊勢の阿濃川といつり江次ゟ渡安濃川三瀬
とゝのり神宮系譜の古道かく社
とゝふいひ〳〵支未集ゟ
往古ゟいせ詞ゟかゟ三瀬川乃名を
○度會郡の三瀬城ハ伊勢國司具教公の築く所ゟて
及乃世記ゟは御瀬社定給〳〵
△みそ　倭名抄ゟ未醤俗ゟ味噌ゟ作ゟ
味噌の字三代實録ゟ出ゟ或ハ唐鑑真和尚の傳ゟ時ゟと食く美
るゟとゝて未曾有ゟ嘆セ〳〵ゟ此名ゟりともつり後人酢醤味噌
ホの字を造ゟり宋孫穆雞林類事方言醤曰密祖〳〵武備志中山
傳信録も醤ゟ譯〳〵て彌沙〳〵ゟ高麗醤乃名ゟ
ゟ韓名なる〳〵又白みそゟつり
日而即熟砕而煮二五菜ゟ
又五斗みそゟつり○みそゟ日ゟ〳〵ゟ香ゟて
ゟ〳〵ゟ香ゟて出香ゟて
て也○きのふ生〳〵ふりてまあ
○海人藻芥ゟ上臈の上ゟふ〳〵
二条良基公の作也とゝえゟ
諸名ゟ意也○みそゟ坊主
の頃ハ夜の聖ゟ出せり○みそ
さゟ考ハみそゟ漉ゟて拂の
みそ　溝渠をゟめり水裾の系統〳〵新撰字鏡ゟ坑もゟめり
同書ゟ掬をみそとゝふとゝゟめり○神代紀ゟ衣をゟめり
系統〳〵祝詞ゟ御服ゟもゝえゟり○北條高時の將ゟ横溝其
ゟ
みそ　倭名抄ゟ霰まゝ雲ともゟめり水あ〳〵ゟ也名詮ハ〳〵
孫愐も雲ハ雨雪相雜也〳〵つり新撰字鏡ゟハ霖とゟ日本紀
ゟ生雨水とゟめり

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

みそろ　物語なとに濫觴の意に用ゐたり、おそらくは韻通せりよりて云
名伊勢物語に濫字を填たり○晦をいふは三十日の義也後拾遺集に
よめり律の古点にも晦日をよめり十二月の晦日を大つごもりといひ又
大みそかともいふ又三十日為二大盡一二十九日為二小盡一と見ゆ

みそぎ　禊除をいふ神代紀にみそぎしはひとよめりみそぎは身滌
也ともいへり禊除也万葉集に身禊とも潔身ともかけり晋書に身禊
作れり身濯の義也出雲風土記御身沐浴と見え日本紀に潔身をみ
そぎとよめり○除服のみそぎは川にまて禊をする也太和物語に除服
のみそぎによりて川の殿に人ありけるに出るとみえたり○御禊の橋は伊勢斎
宮の事にいへり夫木集に
うしや汲いつきの宮とおもふ年なりて今日待まいりけりとの川の橋
ミ虎を小野の江にいふ也

みそち　三十をよめりちはつと通ふ万の物の数にかぞへていふ時人の
年の事にいへるを○みそぢにまりふかりのかたちとは備足石の歌に見ゆ

は三十二相也心地観経に見ゆ

みぞうめ　中臣祓辞に見ゆ填渠又溝埋と書り田に水をひくみぞを
うずむるをいふ○うめみぞは尻溝也うめはうめの略也

みそのや　三十幅をよめり老子に出たり大戴禮にも十輻以象月と
いへり○日本の車は八葉巻にも矢三つられて廿四輻也雑車は輪七枚なるて
輻の数廿一枚也出車には別製ありといへり

みそぎがは　御禊する川也名所にいふを○伊勢儀式帳に御滄川と出
て論語の滄浪之水清まば以て我纓を濯ふべしといへるよりまうけたるにや

みた　神代紀に御田とあり皇代紀に屯田とよみ古事記に営田をよ
めり唐書に塞営田渠と見ゆ○代々大神宮に寄られし田をみたと称す
阿濃郡の如きは納所村に御倉堂ありてみたの米を量る今神宮寺とい
ふ○箕田は武州足立郡也八幡社あり渡辺綱を祭るといふ

みたつ　神代紀に化作又化竪をよめり古事記に見立に作る今もみたて
るといふたちけるたといふのみなるべし一説に生の略とも経始ともいふ

みだる　乱をよめり　みだしと同　○圜碁之
みだるといふ髪をよめり　○字彙之詞之卒章曰乱者理也所以発理詞意
趨讖其要旨也云々
みだれ　奉為の字をよめり　日本紀以下皆國史之多く用ゐるところ
そゝ　焚也　出雲風土記　武紀ともえゆ
みたりよ　妄加謾漫恨濫謬をよめり　妄にして叱りせめ漫にみだりつゝもる濫にまぎらはし　謬にあやまつ意也
又浪をよむはまよりのふき意也
みだらし　日本紀之古祝詞之御弓をよめり　御執の義也　万葉集之御執梓弓をよめる如し　御執の間に敷を御佩のつるぎとよめる如し
○みたらし川　賀茂より式内出雲井於神社の社下より出御手洗の義とあり　又たゝ厳嶋ふたゝびともよめり　同一ひとしと訓通ずる又神前の川ともいつくしそとよめる伊勢物語之如し

遠せゝらぎ川　出雲風土記　神名火山ともよめり
ていは今集之末を伸ていふ　弄盤家集之浅茅ふるみたらし川ともよめり　春日社之慶賀門の内にあり　歌合之京極御息所
春日野の松もかなとよみそゝぎ汰川のぬれ衣ともよめり
みそまつり　日本紀之招魂をよめり　○日中行事之日ごとのせちえの御まつり今にいたるまで毎年也ともえゝり　魂志つるの条ごと同意ふべし
みそぎ　須氏之之ゆ常之狼籍をよみ文集之浪迹をよめり
霊異記之濫をみそぎとよめり
みそまのみや　日本紀之恩頼又皇霊之威を訓ずる如し　御賜の堕るをもいふ
也とて万葉集をたのむのみそぎしてよめり　○後之条を詳にて御竈のそこをすゝ曽丹集之いつまでかひたきまゝにみそぎせんらひなり

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

奥義抄に歳の終りに亡魂を祭りて恩徳を報ずとて御魂のふゆといふ所謂荷前祭也といへり除夜に亡魂来るといふ事は報恩経にみえたり

△みち　道路をいふ神代紀に衢方もよみ皇代紀に学業もよめり又充るの義往として有ざるなくみちたる意也といへり爾雅に道直也往に死所届也とみゆ道又導に同しみちびく也○神代紀に御路を訓せり御は犬々出見尊に然ていふなりや一説に真路の義といへり又ちは本語みちは御路なりといふ也ともいへり○神代紀に海鱸を訓せり本草に其皮潮ふるときは自ら毛たつといへりよて訓するが如し北海に出て其皮をもて鞍にかくといへり蝦夷の方言におもえつへといふ是也といへり大さ二歳駒ばかりと有てく面は犬のごとく手四指あり足なく尾ありうしほ干日なと居て行方志れず腹の毛黒く背は赤きありて鼠色也しこをみちの類なりや人なづてうふやといふ○蜜の音をもいふ日本紀源氏物語などに同し蜂は百花をとりあつめて醸成その也本草に己が糞を用ふといふ人の溺を用ふといへるは皆謬也と篤信の説也又在ㇾ人家作ㇾ窠擡ㇾ取養ㇾ之といふは本邦も同し

みちのく　万葉集にみな陸奥をいふ倭名抄にはみちのおくとみえたり國号は義字の如し俗にみちのくに又むつのくにといふ事によむ事なし續紀に陸奥國上治郡と今此郡なし

みちのくち　道口也元其國に前と称するは皆かく訓せり皇都に近きをいふといふ也東鑑に伊勢國道前郡とあるも是也道は七道をいふなり

みちのしり　道後也元其國に後といふものは皆かく訓せり神宮雑例集に貞鎌三重朝明を道前三郡とし神三郡を道後といへるを公義也○古事記に道尻とかけり伊豫に地名道後あり

みちひらき　神代紀に啓行をよめり詩の註に啓開也行道也とみえたり今皇太子に行啓と称せり

みちのくがみ　源氏にかけり檀紙也奥にうちのくのかみといふその始め奥州に出るをもて名くといひ又ちのかみともよめるも是也紙中よりを出○うけくる檀紙明月記にみゆ

△みつ　三をよめり父母の子のみまた天地の中に居るをもて三を身つと

いらふ　一〇満も身とくらかしる詞なり　みちるともふちなり文つも也実も同一〇名よ光をよむ日本紀よ光宅をみち弥とよめり文選注よ光大也とみえたり　一〇三の浦よ高津敷津難波津とらふるて三津浦ともよりしらへて日本紀よ難波御津ともみえたり　一〇就のふとよみ合をよ万たへよう物　一〇紙波いりよの条一古事記の載其御船之御綱柏者悉投棄於海故号其地謂御津前也とみえたる御津い官津のなり一古への流をうくる一伊勢二見ともいふ長明よ手枕いりよ芦屋村ともよめり

みづ　水をよめり實よの軽するなり一〇水よ方圓の器よ従ふとらふ白詩よ无情水任方圓器不繫舟随去住風とみえたり昔子よ本りより一〇瑞よともむも水のきよりよるなり一又真墳の条也ともらふ一〇美豆の森よ山城の淀よいふ瑞野よ類聚國史よ山城國綴喜郡美豆村也水嶋よ備中よあり

みつぎ　貢をよめり倭名鈔よ御調いふ其実也貢物とよ手ふりもよめり一〇祝詞よ白鵠の生御調とも白馬の生御調とも見給の条也一徒然草よ御贄也女のふりふとの事をみづらよ男のふりふとの事をみづらよ御髪社会也女のふりふとの事をみづらよ男のふりふとの事をみづらよ一〇源氏よみづらゆひふる髪づらよ方条集よ角髪をみづらよめり左右よ分てこふる角のこときよりふ昭子也こよみづらゆひ一也延喜春宮式元日朝賀の條よ双童髻と耳の上よりゆひて耳の条よけるもいふりふこふの末を耳の上まよりあげてこふ一ゆふ道よ垂るもいふ結様ふ雅亮抜よふりふくこふ同東よふりふの短きよ呼ふくみづらともふこよみづら　一〇天武紀よりみえたり山上ふ史

品胎也三男を生成記せり一〇天武紀よりみえたり山上ふ史必書せり乳母を賜ふ事もみえたり一〇江次第よふりふえとの玄珠宝語よ東堅よ子を用ふるふりふ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

人生三子主大平〳〵らつる意あるへし
を出生ぬ今の存在〇伊勢の三ツ子山ハ蓮花伊勢記にくわしく東鑑に
伊勢三箇山と亦見也式伊勢飯野郡竹山神社〳〵山名あり瀬
織津姫伊吹戸主速佐須良姫三神と祭るとしるす山名蓋三神鎮坐
据也竹山ハ伊勢と近江との界のみうをもつて也今鈴鹿社と合祭て
倭姫命と四座〳〵を

みづかへ　日本紀に瑞穂とそえそらうまの嘉未の条にみつかへ
詞也〇新撰字鏡に滲涙をよめり水流轉聲勢やうにそえるあり

みづぬー　みぬー〳〵とらつる式山城久世郡水主神社十座とつゞく
に就中同水生坐天照御魂神水生坐山背大國魂命二座預相嘗祭
とある姓氏錄に山城天孫水主直火明命後也火明うま山代根古命
て都て十世也舊事紀に王勝山代根古命山代水主雀部連輕部造
籘宜部ノ百祖とそいひ天照御魂命と火明命也次天香語山命次天村
雲命次天忍男命次建額赤命次建筒草命次建田背命次建諸隅命次

倭得玉彦命次王勝山代根古命〳〵とつゞけ山代根古命ハ山背大國魂命是
也年中行事次合祈雨
あま雲ぬやくえうひく水ぬしの神よ向とうなやかし
みづつめ　神代紀に罔象女とよめり古事記に彌都波能賣神よ作る
罔象ハ水神也神功紀に水葉とらつるも同系うや倭名鈔に魍魎とみづ
ち〳〵訓し水神也と注せり
みづうら　南都二月堂に水取の行事ありて修二月法〳〵と禪寶忠よ
り始て其事を享釋書に委し終に淳署家の右〳〵ふうまれと水政
の事ハ伊勢御鎮坐の諸記に委〳〵えて村雲命の故事〳〵泉治中臣壽
辭よは天忍雲根命の故事とす春日若宮よ押雲命ます〳〵まもりさしハ
其神蹟ある〳〵よ若狹井の經ら〳〵よハ賢木をかざらう〇伊賀一の井
村より二月堂の水取ける新を出を世の薪の能とそえそえそえそえ見
也むら〳〵村よ道觀〳〵らふ隱者にうら若狹の南觀とらふ僧とあん二月
堂と再興やう〳〵幸にうら其南觀ら塙ら井と若狹井〳〵らう〇万葉集

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

この水をめぐりて山ぐつくりたる花の形の如くなるを
水ぐるまの略の如き色ともいふべきなり
みづしけ　七者の霊よ水をよく防ぐ事ありと日本紀に見ゆ
巴が死せし時よ影姫哀傷の歌よ玉筒よ飯えりの玉椀よ水えを盛ると云
ふが
ごろみ　倭名鈔よ湖とあり水海の義と古へ淡海ごろ近江の湖
琵琶湖ごらふ其形の似ると也海東諸國記よ崇神天皇元年開近江州大
湖ごらふ我邦此説ありと雖ども久しくよりて
澗通譜之湖北方止水深澗譜之海子ごいへるよう西湖の如きよ船の往來を
る河也ごいへるよう〇石花の海よ万葉集長歌よ駿河國富士山の戌亥の隅
よありて大湖也猪苗代の湖よ陸奥國若松の東笹山近き所也共よ近江り
續ての大湖也
みづひき　よ張を帽額ごらふ水引ごいへるよう水引ごいへるよう名よ船よ据るやうよするものなり

幔幕ごいへるよう〇紙捻の水引よ家同じく絲鬢ごいへる城殿よて造る
白の色なりしを後よ赤ごいへ半ごいへ青ごいへ半ごいへて式章よ用ゐるごらふ懐紙短冊女房の髪ごいへの水引ごいへ皆白紅
一條也ごいへるよう女房飾抄よかごいへるよう二條也ごいへるよう
こ水引ごいへるよう一物ごいへるよう結よ内よごいへるよう用ゐかごいへるなり
開きみまし　ごいへるよう〇まよらよう海根也其形の形ありよ
似ると赤白あり矮生のものをらやがてひごいへるよう金水引ごいへるよう西國ごいへ
らよう水楊梅也〇正字通よ大祖好水引餅即今之水麺やごいへるよう
みつのり　伊勢風土記よ安濃津仁徳天皇三年乙亥定三津其一也東方
之蛮船本邦公私之着船湊入之船各來于此待其風雲舉國之名湊也ご
ごいへる武備志日本考よ國有三津皆商船所聚通海之江也薩摩州者坊
津筑前州花旭塔津伊勢洞津三津唯坊津為總路客船往返必由花
旭塔津為中津中國海商無不聚此地洞津為末津地方亦遠ごいへ
ごいへる坊津ハ甕島の坤方よごいへるよう或説よ坊ハ防よ従ふ一ー益防人の津ふ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

</〻〻しるし博多を那珂郡とあり三代實録に博多是隣國轄藝之津警固武備之要〻堀河百首に

海ならず博多の湊よかるらむ船よ時ゆくも

往昔は博多に舶來を二百年來の蕃客を饗應し給ひ阿濃津は清盛の地地よりも出船〻熊野よりも平家物語よりも明應中の地震よりも津波ありて大船入がたく〻芝多く大坂七ヶの三都と三箇の津〻らふるも舩三津と謂ふたるなり

〻〻〻　自とよめり多づるも自身ゝも自與自使自令ふと連用ゝもゝも同〻又身自ゝも連用を身〻躬とのみ書〻いづれも又親とよむも同〻又躬自ゝも連用を身〻躬とのみ書〻いづれも又親とよむも同〻又身自ゝも連用を身〻躬と

〻〻〻　万葉集よめり瑞山の〻ゝ本ゝ〻みづ〻〻〻生

みづぐき　水莖の義水中の白莖水中より出るものとらふよりて或は行と訓せり行あるべき也〇童のみつくきとらふよりも本物よりえらぶ頸をもとらふよりも〇まとらふも水莖の義なり〻〻喜撰式に筆〻みづぐき〻らふとえらぶ源氏にも人の淚を流をもふ也〻〻〻よめり

万葉集に人まくをよ流をもふ也〻〻〻よめり

よく穫麟一句淚與筆俱とらふよりよめり〇新拾遺集に

水くきの岡の湊乃浪の人を救かるかつらかな

万葉集にも水莖岡〻らふ仲哀紀に入岡浦到水門〻〻を自洞海入之〻もゝそ〻ら筑前遠賀郡也同集に水莖の水城〻らふを統前御笠郡也ゝもに水山の義ぞ〻〻

〻つのみち　日本紀に三才を訓せり天地人の道也〇三經ともいふ門井厠の三也源氏に〻〻〻〻〻〇関白兼家の子道隆道兼道長ありて摂政〻る世よられと三道〻らふて昭宣公の三平に比を三平に時平仲平忠平也大鏡に〻も

〻づくかり　倭名鈔に準縄とよみ今水縄ともみづり〻〻〻〻

日本紀ニ水泉ヲ訓ヤリ字音ヨリ泉法也トアリ新撰六帖

足引の山よりかけてくるみづとぐむ　光人の体をいう按るニ詩の注ニ兒歯老人歯落更生ト

みづとぐむ　光人の体をいう按るニ詩の注ニ兒歯老人歯落更生ト

ゑゑら瑞歯別天皇の御名ニよれバ瑞歯ハ長壽の相なるべし

〳〵むかめ〳〵むら〳〵ふる〳〵或ハ三歯組ニて僅ニ殘れるを云ふ

いみづとくむニて三輪組の意ニ似たり然れど後撰集

の詞書ニあたゝ〳〵そおよそこれ〳〵ゑゑれ〳〵三輪ニハ

みつのき　瑞垣〳〵書てしんぐ〳〵とよむ書紀名抄ニハ瑞ハほめ〳〵

ふ瑞の玉垣と同〳〵神祇本源ニ大社瑞垣一重珠垣二重トゑゑくのとハ

別也ゑゑ〳〵式伊勢國河曲郡弥都加佐神社ハ玉垣村ありて俗ニ玉御

前〳〵ふ〇万葉集ニ油ふる山の水垣の久〳〵き舒明紀ニゑゑ〳〵ふ

ふ布留社と石上ニ建ゑひ〳〵書事紀ニゑゑ〳〵ふて後世ハ久〳〵き社の柵

辞ニ水垣〳〵ふる也伊勢物語ニ君ハちは〳〵ふ〳〵ふ水垣の久〳〵き代ニその数を通

かく〳〵〇續千載集ニよつぐ〳〵このみふひ〳〵とゑゑれハ万葉集ニ大御舟〳〵

よろづ同〳〵日本紀ニ皇舟沈みつゝとゑゑ

みつゑゑろ　延喜式齋内親王奉入時祝詞ニ御杖代トゑひ日本垂仁紀ニ

ハ御杖トあり風土記ニ宇陀郡篠幡庄御杖神宮倭比賣命籤天照大神為

御杖至此地仍奉御宮地経三月終為神戸トゑゑ〳〵り〇姓氏錄ニ上宮豊

聰耳皇太子御杖代トゑゑゆ〇天子の親く崇〳〵せ〳〵ふ代ニ立ゑま

ふ意杖ハ神ニ扶けなるよりふ成〳〵

みづぢまや　水驛也今ゑゑ〳〵ふ水路の驛店とふ也〇須氏岷江公楚

〳〵びむまやとハ男踏下ふひ代ふ人ニ食ニ飯ふ処ニて酒或

ハ湯漬ふ〳〵用ふるをいふ也食ニ飯ふるを飯驛ト

も匙驛ともふ也〳〵ゑゑふ

みづくるま　水車也西土ニといつう三國の時馬鈞の作る所也〳〵本朝ニそ

ハ良峯安世ニ始まる支那集ニ

ふかあやふ字法の川流乃ふ車ニ

〇上總ニ水亀と水車ニふ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

みついそ　後の名目は白河院の中宮賢子入内おりての後御懐胎の御けしきおはしますほどにてのむ月の中比園白殿基家師實公等内おはしてゆうらかくいはまほしの大まうち水をとり上よりかけまゐらせおはしけるまゐらせたまふをそふらよと奏せしかば先例多くありて建武年中よりの記者なくてふれをふしてとがめなし嫁娶をもてはやすことあてはむ月よりは必ず妻の縁家よりいそしみて行ひ給ふ也とぞ

之女始適人時妬斯夫婦使祓除多云々

みづかゞみ　水鏡の巻也水をくゝみ見容之意墨子曰以水則見容之意と云々

ぞえもり〇料理之事の水鏡とぞいふ

みつの巻　續千載集よりめり喜撰式よ遠いつのとぐくしくらふとぞえもり遠い鏡意をもてみるゆへ唐書よ太宗臨朝嘆曰以銅為鏡可正衣冠以古為鑑可知興替以人為鑑可明得失朕常保此三鑑内防己過

とぞえもり

みづかゞみ　伊勢物語の歌よりめり水鏡紅よ水移るえ六帖よ

木のまよりもれくる月の影見れば心つくしの秋は来にけり

在原友干歌

志賀の山越の川と清よりめりかゝるよ本まろもよめり

りとぞえもり例ありて諺ともいふべし

みつのふつ　日本紀よ徒罪をよめり徒の奴也とぞえもり身仕の家人

みつのひる　源氏よ三日の夜の餅の事よいへり尤傳襄公よ縣老人年齢を問ふに臣ら歳ハ甲子ぬ朝也四百有四十五甲子也其季於今三之一也とぞえもり師曠考て七十五歳なる事を知しとぞえもり据也とぞえもれと實ハ三捄を一膳よ居て鶴の口よ箸をくゝみさせて出をそのおもきよ気よをかりを云々あゝんかしと源氏の歌よる〻三日の夜をふけあるいきよ葵上かくをきよ折ふしてはゞかりありて忍びやかのくちまねを催先心得て待ちて向ふ折りく源氏もまた〻一

うしき説つゝやうしらり
みつぐよりぞ　三ツぞ四ツぞに殿造りせりといふもさく軒端の義なるべし
藏玉集に檜を三間ともいひ四間草ともいふとみえたり古説
に檜とするによれど古も同韻にて三ぞ四ぞといふ意なるべし
みつながしは　日本紀に御綱葉とみえ延喜式に御綱柏に作り又三津野
栢に作り類聚國史に三角栢に作り儀式帳に御角栢に作り大同本紀に神綱
栢に作り筑紫風土記に御津栢に作り輔親が哥にはみつの栢とよみ侍従
か手をみの栢ともよめり皆同し大嘗會まて三角なり殘めて名とするなるべし○古記
に志摩國土貢嶋よりたてまつるよし見えたり今も忌物を貢する中に三角栢あり
葉の形かしはに似てさきとがれり當時伊勢にていふは大かしはなり或はあかめがしはなりといへり
とあり○古事記に大御酒栢延喜式に栢酒とあるも儀式帳に御角栢に盛と
しも大嘗會式に人別給栢即受酒而飲訖即為鬘而舞ともみえたり○葬儀
にみつながしはも御綱の義なるべし
みつのあそぐふ　源氏に女は三になるまでかつぐふといふことのよしみえたり儀礼に

婦人有三従之義無専用之道といへる義也白楽天も人生莫作婦人身百年苦楽由
他人といへり
△みてぐら　倭名鈔霊異記に幣帛万葉集に帛をよめり御幣座の義也
ては和幣の意座は千座の置座の意古事記にふとみてぐらとも一説にた
むけを納めてたてまつるとみえたり○みてぐらは幣帛代の義
也祝詞式に伊都幣又宇豆乃大幣帛の足幣帛ともみえたる也○大社は幣
を案上に奠て奉り小社は案下におくよし差等ありて是神徳の尊卑によりて
神位をわけてしらふに准えたり○正保四年九月十一日公卿勅使發遣参
議左大辨藤原綏光卿
内侍所御神楽をもみてぐらや納るをはじめ御代の秋ころ
嘉暦年中より断絶ありしを再興ありし時も九月の例幣使は元正
帝に始りけれど後は他月にかはりて仁明帝より永制となれり
みてまろ　神代紀に代御手をよめり天子に代りて神事を勤むるをいふ也○姓氏録に御手代首あり霊異記に御手代東人とあり

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』 請求記号 837-48
ガラス使用

〈みと　神代紀ヨ水門ヲよめり是ハ自然のものとらふ私記ニこゝを瀉国ト
也〉らり○今らふハ開ハ水門也と注せり是也俗ヨ種の口ともらり○
水門を音をもてよふものハ家庭ヨおろせらき也○蔭を水戸ニよめ
るも字義ニらるもの
みとし　祈年祭祝詞ヨ御年皇神御年初奥津御年をこうえたまり
稲穂とらふ〳〵有年をそうともよめり是也みの
な真ヨ同し〳〵て美る辞也御嵩神ハ進雄尊の孫大歳神の子也其祭の事ヨ
古語拾遺ヨ委〳〵見えたり
みどり　緑翠をよめり水気の深色を借くらふ緑色の紅毛語ぐろう
んとらふ○松のこゞりハ蝦菜をらふ今て色ヨをりそめ
みどりこ　続日本紀方薬集ヨ緑覚とをり禅弱ヨして松の蓋ヨ
の如きをらふるゆへ也て方ヨ集ヨ若児をもよめり新撰万葉ヨそを
阿孩児をよみ霊異記倭名鈔ヨ嬰児を訓をり釋名ヨ人始生曰嬰ハ牢也
抱之嬰前乳養故曰嬰とよめり宗祇説ヨ七歳までをらふとこゝえたり

みとしろ　三代実録ヨ御戸代ヨ作をり祝詞式ハ御刀代とかり日本
紀ヨ神田又神戸田地ともよめり成式帳ヨ御田代御田手佃奉ヲこゝゆとかた
の轉音ニて代ハ附てらふ詞ぬ〳〵一説ヨハ戸の字神戸也百姓の戸を
らふ代ハ田也続日本後紀ヨ御戸代田一町ふともよめりたゞ紙ヨ
みとしろの内ニこいつれ戸帳をらふ〳〵
みとせのも　新葉集ヨ新待賢門院隠をさせ給ひて後三年まて諒闇の
条ヨて有々て冷泉御服ヨそけり時の五月五日ニよめり前大納言實為
ヨ給ヨせけり後村上院
今ハ又音ニよめれ二年まて服ヲうるをそうけるよ又後村上院
又妙光寺内大臣ヨうて後三年の服ヲうるをそうけるよ又後村上院
の素服を賜りてもひつけ給りり長親
三年まてそかゝぬ涙のふち衣とハまことく
如是とハ芳野帝の世ニ二年の喪制も行れしヲ神武天皇崩し給ひし
て三年位ヲかりき其後も或ハ一年或ハ三年ヲ位ヲかりき皆喪ヨ居さまふ年

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

とつぐ〳〵天智天皇七年ちぐく位よ即せたまひつ〳〵ことふ其つぎ
つぐえうの三代實録よ本朝制令三年之喪為二一年一周甚之喪亦為二九月一自餘
以下皆有降殺一とつぐえうはいつとその代よ始りしまや
みくあくへしの　古事記よその神代紀よ事之始みてあつまりてよめり
御戸與（まとよ）　神代紀よ遘合（まぐはひ）をよめり舊事紀よ御戸（みと）婚毘（まぐはひ）よ作（つく）
みとのまぐくひ　古事記よその假名たがへり
と御戸（みと）の閨門（ねやのかど）をよまぐくひの目合（まぐはひ）の義也時生（ときまる）よの假名たがへり
目合（まぐはひ）古事記よえとう為目合而相婚（まぐはひ）ととつ〇上總よめぐくといふ
ひ信州よ祢つまるくらふ
みとのまぐはひ　祈年（としごひ）祝詞よ御年（みとし）皇神（すめかみ）とえゆ式高市郡御歳（みとし）
神社同郡大歳神社古語拾遺よ大年（おほとし）御歳（みとし）神（かみ）と引つけしへまた同神
あつて古事記よ須佐能男命神大市比賣（おほいちひめ）を娶て生二大年（おほとし）神次宇迦之御
魂神（うかのみたまのかみ）と有て何をも穀の神よ座（ます）と古語拾遺よ大地主神の田よ御歳（みとし）神

崇（たたり）ありつ〳〵ふ改事（あらたまること）を記せり式よ葛上郡葛木御歳神社祈年祭（としごひのまつり）
祝詞よ白馬白猪白雞（しろきうましろきゐのこしろきとり）を備奉（そなへまつ）ることをいへり
みとりのそやー　盜賊（ぬすびと）をいふ海道記よ若槻（わかつき）といふ所を過て横田（よこた）山
を過る
そやもろ人の心（こころ）ふみとりのそやしみかく山名（やまな）とえゑり
輿地志よ諸（もろ）〳〵命（みこと）聚藏綠林（むらがりかくれてみどりのはやしにあり）注よ前刑山名（さきのおさやまな）とえゑり
みとせ　戸令（こりやう）よ夫没落外蕃有（おつとらくがいばんにあること）二子五年（こつごねん）一不（ず）改
及逃亡有（およびにげうせたること）子三年（さんねん）一不出者並聽（ゆるす）改嫁（かしやうすること）とえゑり今もみとせ乃公
法（おきて）待（まつ）り
みの　皆畢咸皆（みなことごとく）盡（つく）などをよめり舉（あげ）已下皆也し住（とどまる）を身成（みなり）のそうや〇
蝸蠃（すがる）とらふ水蜘蛛（みづぐも）の糸（いと）水中（みづのなか）にそゐるものせしといふ〳〵化（け）して蛍（ほたる）となる
もふり新撰字鏡よ蜘又蝪を訓（よめ）せり和字（わじ）も倭名鈔よ河貝子（かはにし）を訓（よめ）り俗（ぞく）
用（もちゐ）琴字非（ことのじひなり）ととえゑり山中（やまなか）よて誤（あやまり）て泥壁（どろかべ）の内よ入（いり）数年（すねん）を不活（いきず）をりて
今俗（いまのよ）是（これ）をかうるとらふかがうるなり蚯蚓（みみず）殼（から）をかりて住（すみ）とりて泥（どろ）そいつる也

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

みなも　日本紀ニ水沫トよめりみなわノ如ク水沫ノ如シ水沫ノ如也祝詞ニ青水沫も幸倒てトゝえるものあり友ノ如也續古今集ニ

巴ノ川ノみなもまでもやみのころ

万葉集ニ水沫ヲ微命（モロキ）トよめり

虚無堅固トよめり

みなわ　神代紀ニ天ノ御中ニ誓約之中ニ生ル所ノ水上人所會也ト注ニ水ノ泡ノ如キ物ヲ或ハ國ノ字ノ中又里ノ字ノ中ニ水沫ノ如シトよめり○零ノ字ノ真中ノ象也トいふ万葉集ニ水沫ヲみなわトよめり又万葉集ニ湖ヲみなとよめり○みなわノ如キ中ヲとりよめり

みなと　常ニ湊ヲよめり水上人所會ノ義ヲ取ルなるべし万葉ニ水門ヲもみなとよめり日本紀ニ水門ヲはみとノ意同ノ古事記ニ水戸ヲもみなとよめり又万葉集ニ湖ヲよめり○みなとノ字ノ義ハ前ニ出ツ

凌川ハ矢田部郡也平通盛ニよりて義死ス樽正成もさゝ江ノ終ヲ見るよりみなとゝ

南ヲとふ日本紀ニ明字ヲよめり皆人ゆの各日ノ南トいふ時ハ万物皆明ラかなるよりとよめり○伊勢物語ニ南風ふきて續日本紀ニ天平宝字五年九月摂津國御津村南風大吹潮水暴溢ノよめり

みなづき　六月ヲいふ水月ノ義ならん一ケ月ノ内ニ水戦ノ多キ月ナルヲ名トせるなるべし詞ニ一ニ神嘗月ノ上下略也トいふ万神ハ雷也

みなもと　古事記ニ御名代ノ字ニ定ム又云為ニ八田若郎女之御名代定ト

事ニ定めさせ給ふ後世ニ比ヲ以テ御名ヲ後世ニ伝んとあり何部トいふ

田部也トゝえ又續日本紀ニ詔物部大別連公白皇后不生皇子以ニ大別ヲ定ニ

皇子代ニ名号ヲ為氏改賜ニ矢田部連公姓トゝえゝり

みふとし　源トよめり水元ノ義也○皇子ニ源姓ヲ賜ヒ者ハ嵯峨帝乃

皇子源信ニ始る清和帝ノ皇子ニ賜ヘるを世ニ清和源氏トゝ又宇多帝ノ

皇子ニ賜ヒ宇多源氏トゝ延喜帝ノ皇子ニ元服以前ニ源姓ヲ賜ヒ

事ニ河海ニ委シ

みふね　式ノ祝詞ニ船ノ過ノ字ヲ書ケリ船ハ水ニ浮ノ義ナルよりいふ意ありトいふ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

みるかぎり　神代紀に大臨とよめり見哭の義なり○大臨は左傳にも同
と杜注に臨は哭也といへり
みなそこ　日本紀にはゆ水下経の義よりて奥につづけりみるそこも同
一水底経の義也
みるめざを　水を馴る稗也万葉見馴の義よりて古今集にも
ここうこうこみるめをあるとよめり
勅撰集に
世の中はなほ侍るべみるめ川こぐ舟人よ又愛敬餅とよめり日本紀にみるめなのもとに
みふこりち　皆子餅こもり又愛敬餅とよめり源氏に三日夜餅ともあり
らふそ也婦と娶る家三日めに餅つくをいふ
五雑俎に嫁女三日父母家來餉食俗謂之餕女とぞ餕音婬にて侯鯖錄に
嫂女に作るも
みるくのもち　北山抄に南海道とよめり日本紀にみるめなのもとに
みるれるる　源氏にもみるれ未の水をとぞひるれ

倭訓栞　前編之三十

後撰の歌にいつ海よ
みるれ布をくるれてくるれ侍るらん
みるづおくる　六月晦の大祓をいふ延喜式に十二月進之といへり
始て宣命と挙ふり江家次第に祀師著座讀祝詞先讀宣命云々集侍
より諸聞食止宣まてをいふ也貫之集に
公川よりくてなる氏条に流のひみてたくみるくをと
○閏月ある時は閏の晦日と用ゐるをいふ後撰集に
七々に天のうりとかく詩り後乃みそ紙みそぢ也
○天下諒闇の時は此後ある年を東鑑にこゑり實朝公
ひくくのひくさよある年のあく年とりふる月ありて月のあることく
○後撰集にみる月後しを何条にまかりいて月のあることく
加茂川の水底をくて忌月と行てこんこやをくひる
又後の月を読年不審なり然共六月中の後宮の
時後をいふ也と為家卿の説也今を六月十九日より紀宮に詣ふ公卿

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

みうくらいう

△みよへ　日本紀ニ御膳トヨメリ御贄ノ義也紬中抄ニ大ヤケニ大ヤケニ
ものとらふという

みにくし　醜トヨメリ増韻ニ惡、醜也見惡キ義ナリ日本紀ニエビス無
色ノ字モヨメリ王褒講德論ニ嫫姆倭傀善警者不能掩其醜ト云ヘリ○
醜女ト識ル詞ハ西國ヨリ渡ツタヘ物ニテ面ニ塗ル此ノ佛粧ヲ云フト云ヘリ

△みぬ　不見ノ義也万ヨクヌ也

みぬさ　御幣ノ義也万葉集抄ニ諏訪明神ノ条ニ名ヲ九ト云ヒテミ
ぬさまるニシメヲ云ヘリ或ハ御麻トヨメリ

みなめ　不見目ノ義也○飯馬ノ俗ニ津國ヨリ渡ル人訓ヲ誤テイフ
まくらとある事ハ万葉集抄ニ風土記トリテヨメリ能登郡敷
馬山ヨリ云々神功皇后ノ時ヨメル歌ニ船ト造リ給ヒシヨリ云々
△みを　倭名抄ニ嶺峯ヲヨメリ大根ノ義成ル○カノミヲモ實ノ
義ト訓ズル事ハ古今著聞集ニ云々ト云ヒ俗ニムネト云ヒ刀背也異朝ニ山
背ト峯ト云ヒ屋脊ト棟ト云フ其義同ジ○倭名鈔ニ梁トヨメリ
梁ノ義ト云ヒミヲ脊トセルヨリ云フ也
△みの　みの國ハ古事記ニ三野ト云ヒ又ハ本巣郡ニ大野三所
アリト云ヘリ舊事紀ニ名本巣郡ニ美濃ヲ美濃ト云ヒ身荷ノ
義成ル詩ヲ何蓑何笠ト云ヘル万葉集ニみのうさきヲ来
ル人やらん伊勢物語ニ簑ト笠ヲ取アヘテト云ヘリ延喜式ニ穆卿
馬簑蜷簑登美簑ノ名アリ夫木集ニ山菅ノ云々新撰字鏡ニ
毘ヲヨメリ為家卿

うちつ人の野ふよりふるその毛沈ふく世ニシテ苦シクヲ

○竹葉ヲくと編ト合柱トヲヨト云ヒ赤類也○古今集ニあかたゝみの條
ニ注ニくるハ説文ニ簑雨衣也トアル意也○倭名抄ニ蓑ヲ新撰字鏡ニ茅ト田ノ字
ノ毛ノ簑ニ似ルヨリ云フ歟ト云ヘリ新撰字鏡ニ茅ト田ノ字ヲ稲ノ芒トヲヨメリ○俗ニ稲ノ芒トヲヨモ葦ト同ジ云ヘリ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

家芸の訓ありて蔓ともに轉用せり○蔓鳴八筑前也蔓浦八尾張よりも増基う遠江紀行ふ○

みのふ　實ととくるかしる詞也のるかみのり　孝徳紀ふ正教とよめり御法の系佛法とらふ也○みのりの花ともふ

法華九蓋也蓋圓

いりくものことくひろごりてかげもとかみのりの花ともかきたり

みのもろごろも　蓑代衣の系也八雲御抄ふ雪のみのもろごろもみきて雲居とよめる系ともふ

ここともふ後撰集よ

ふる雪のみのもろごろもうちきつつ

法氏ものふ山ふしの代衣とよそふ○形代と同く其人のうつしみとするふよりて名とせり

油ふ罪科火難と負せ書つけ其人の名ともかきたり

みのもろ衣とふ○人の身の代ふかけてよめる系ともふ

多と賣て其代りふ小油とらて布施ふ去ふる系ともふ一向の別筆ともふ

とこのもろとふ古手よ

せるふためみのもろ衣ふ○代ふ身價也○今も船人の給料

唐詩ふ何日平胡虜良人罷遠征の意也定家公蘇武取紮ふ故事とおくふ

ふ欲ふれ上古の字ともふこともふ

△みこと　禁裡宮殿の階とふ○みこともふ○陛下の系也○ふりふ

櫻ふ南殿の植也年中行事ふ合もふこともふ○みこともふ支末集ふ見ゆ

石見那賀郡の坂山也

みこかし　日本紀ふ勅も刀も訓せり方紮某ふ御佩と勅の也ともふ○筑紫

かし　反き也○古事記ふ御刀をよめり御刀の字後漢書ふもふ○筑紫

部曰記ふ宮ふ殿抱きをもてみかしふ女將の名ともふ○守刀ふ意也淮南

萬畢術ふ按劍倚戸兒不夜驚ともふこともふ○古事記ふ所御佩とみなせるともふ

みえかり　古語拾遺ふ汉天御量伐大峽小峽之材注ふ大小分雜器等之

名也といへるも是ハ鐇斧の義をいへり○大殿祭祝詞に以天津御量豆事問之磐根木立之草とみえたるハ智謀をいふなるへし○伊勢ノ年中行事に正月十四日夜水量立事云々測月影占年豊凶名水量といへり○御量柱ハ居柱の事也

みはるかし　日本紀に覧とよめり祝詞に見霽志坐國とみえたり今ハくにをとほしてみるをいふ也日神に就ていへり

△みひ　古き物に御火焚をいふなりとみえたり○古事記に授とみひとよめるも御ひの義也神代紀に奴ひとよめ是を古本にはアヒとありてアハミの古字なりともいへり但カの誤とみゆるなりといへり

みひたき　御火申也大神宮倭奔の時にいへる事也

△みふ　物語に多くみゆ御封の義也といへり太上天皇二千戸三宮各千五百戸なとの封戸といふ官符を給りて其地の正税を奉るなりけるを國ハ皆國司の吏務として庄園の如く不輸の所成立て國司不入のたくひになりしハ

みぶ　壬生をよめりみハ産の略成へし拾芥抄門号の條に美福門ハ壬生氏の造るによれりとみえたるも是也又みぶをもいへり○日本紀に乳部もよめり同義なるへし

△みへにゆふ　恋に身ハ痩るをいふ万葉集に
一重のミ妹かむすハむ帯をすら三重にゆふへく我身ハなりぬ
文選古詩に相去日已遠衣帯日已緩とみえたり

みへのかはら　万葉集にみえし壬生忠岑家集に石見潟三重の川波とよめり那賀郡黒川村也といへり八雲御抄にも石見とみえたり伊勢三重郡にも川ありてみへか川なるへし今ハ万葉集ハ伊勢成へし
○古事記に到三重村之時亦詔云吾足如三重勾而甚疲故号其地謂三重といふ是日本武尊の故事なり三重郡をいへり

△みほ　御穂の松原ハ駿河有度郡也古へ御廬浦と云て廬崎の清見関とも讀たる三穂か崎ハ出雲國也日本紀にみえたり後鳥羽院隠岐國遷幸の時うき目をみほの浦千鳥しはしませたゝひとつ所也三穂石室ハ紀伊国也万葉集にみゆ

みほと 古事記鎮火祭祝詞に美保止被焼氏とみえたり御陰の義也
みほぎだま 古語拾遺に御祈玉（古語美保伎玉）とみえ元大殿祭祝詞に御吹支乃五百都御統乃玉とみえたり説文に霊巫以玉事神といへり凡て玉もて寿ほせし故にほぎ玉といふ
△みま 御馬也万葉集に人丸集なとに君がみまとよめり○三間ハ禁中にあり
みまし 日本紀古点に如字をみましと訓せるはいましに同し古への字假名にはいましとかける例多しそのころもみましとも訓せし例にや○俗に向候の意にもいへり也又ひとへにいへるもあり
みまし 神代紀に御席をよめり○元正紀に美麻斯乃父止坐天皇又みまし親王又みまし（孫）光仁紀にみまし大臣といへるはいましに同し神代紀の汝皆みましとよむべし すなはち御席の義也
みまくし 日本紀に欲見をよめりみまくほしき也略也
みまさか 倭名抄に美作をよめりうまの助辞さかはさくの転也りとへ見えきく

坂の義なるべし○續日本紀に割備後國六郡一をおけり
みまな 任那をよめり新羅の西南にある國也御間城天皇の御名によりて本日本紀にみえたりみまなとも任那を相通せり
△みゝ 耳をいふ也忍穂耳尊の耳ハ音をもて讀べし一書に骨とみえたりみにと通音也○俗に耳をとらふとは祝詞に耳振立てとみえ源氏に耳とくといふ耳疾きといふ神賀辞に耳の弥高にといへるを耳疾きといふ目疾きを目高といふが如し○耳川ハ日向にあり
みゝらく 万葉集に自肥前國松浦縣美弥良久埼發舶とみゆ袖中抄後頼の弁に
みゝらくは我日の本の嶋ならばけふもみかげにあはましものを 此弁ハ我邦の末にいへるとせりされも能因が坤元儀にも肥前國ちかの嶋にみゝらくの嶋とて不思議有所に死しさる人見ゆるといへり是ハ肥前國平子嶋の事也とぞ蜻蛉日記にはみゝらくの嶋とみえたりみゝらくハ誤写にや

みゝづか　京東の職塚は豊大閤朝鮮を征せし時の職也といへりされと
高麗陣日記に鼻塚とみえて後の高麗攻の時に行道までの事也朝鮮
軍記には或は鼻きり或は耳きりともみえたり懲毖録にも元得我國人悉割
其鼻以示威とみえたり倭にまさる故劓之刵之欲充傳に以為倭賊つらぬる意
也又神功皇后三韓退治の後筑紫の前田といふ所に大なる塚ときこゆるせ
たまふてきりみといふしを今誤つてきりみとよみたり　四季物語に
みえたり又伊豫守頼義奥州の夷賊を平けしに敵のきし耳ときりたるを
め革籠二合に入てまちのかり土壇の下に埋め堂を建立せし是を耳納堂と云
ひしを誤てそのと堂といふよし古事談にみえたり大坂陣の時にも鼻を
きりそなりし事ものにみえたり文選に馘截萬計とみえたり
△みむろ　みもろに同じ神かきの住家也山をよめるは城上郡の三輪山
を御室山ともいふ神随山ともいふ是也万葉集に神なひの三室の岸とよ
みしは平群郡也神なひの三室の山とよめるは葛下郡の三室山也といへ
と立田川とよみ合せしは心得ぬよし契沖いへり○いにしへ咲は三室の

山の紅葉なりといへる　後拾遺集に内裏歌合にてよめるとあり是は古今集に
立田川紅葉ながる神なびのみむろの山に時雨ふるらし
立田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦なかや絶なん
といふ二首の心詞を全く用ゐられたる事をかきたる中によみ侍れ嵐吹
みむろの山の紅葉かと決定して歌所におくの後は侍る此人よ
き歌多く侍るにえしまをて其く歸りしを故にや三室山立田川の
考　契沖の説よろしきと喜撰は平か父は肥後守橘元愷能因か俗名は永
愷○出雲大原郡の御室山は神須佐手命御室を造りてましますと風土
記にみゆ○五十番歌合に
ちはやふる神のみむろの木綿かけてみしや世のかけに入そとらん
みむろは神の所也鏡は神木に鏡をかけてまつるを云也万葉集に王逕将見
圓山とつかへるもみむろのやまとよむし「みんまもやま」とよむは誤也
といへり○伊勢物語に惟高親王の御ぐしおろし給ひて小野に坐しし
事を記して御室に詣て拝みたてまつるといへり日本紀に房をむろとよみ

れい御座所をみなおとしたてゝ御房も同し　今仁和寺をたてゝ称するも同義なり

△みめ　東鑑に眉目とよめりまことに容貌をいふ辞也又盛衰をもみめといふ　天正中慶光院に賜る遷宮の時の倫紙に美目とこそ仰られたれ　日本紀に妃まき女御をよめり御妻の義也とこそ源氏にもみえたり

△みもろ　神代紀に三輪の辺を三諸山とも御諸山ともよめり　万葉集に三諸つく三輪山とも鹿背山ともよめり　延喜式に三諸の神社をいふ　これ万葉集に三諸のまさきの葛と詠る意屋戸に三諸を立てとよみ神楽にも神の御宮と祝ひそめたるなり　鴨祐之がみもろの二上に鴨神祭るかみもろのさかきとよめるも同し　別てはやしろを大名ともいへり　賀茂の祭にも日枝の山もかもの負せる大神代見の葵香宮と称するは是也　天正中大亀如一○山城紀伊郡御諸神社を伏見の稲荷谷の八科（ヲナ）に遷して城隍神とす　慶長八年に復故地に鎮むるとて八科嶺

を古御香と呼ると暮記に白菊神祠と呼るに重陽に菊花をとりて祭るをそいふ

△みもろ　催馬楽にみもろのあさなあさなとよめるは是也　おなじ家同し

△みや　宮をよめる海家の義也と名義宮殿の義也宮号社号の称もまた准へ知るべし　○古へ貴賤をとはず人の家を称して宮と称す　伊勢の事にて多くみえたり　万葉集に日本紀に檀日宮とあり　延喜式に檀日朝とよめり　神名式に八幡朝の事を載たり　皇統に大帯姫朝神社とあるも八幡神社をいふ　○陵をも山陵ともいふ　別の事

みやこ　都をいふ日本紀に京師をつくり又華城をつくりの宮所の名也くしろ管家方楽集に城をよめり○朱雀門より羅城門まで大道を朱雀大道の東の方を東のくやこ西の方を西のくやこといふ左京洛陽かこといふ是也西の方成西のくやこといふ右京又長安くらふ是也称徳紀の歌に小詩乃美あ古波宇呂ツヨ豆乎乃美也とよめり○かりの宮所をとみやこといふ也豊前京都郡より日本紀にみえ又万葉集にみえ少古歌に

いつくふと君まつらむ城柱みやこ形なしと

文徳實録に貞観四位上和気朝臣仲世奉公忠證毎至嘗日看向宮殿二首

清慎第六子うく天性至孝とのつかへ也類聚抄に

近行人二輪の山邊ゆきつゝ宮ぬ社のなをぞ忘れぬ

○琉球の南に宮古嶋あり中山世鑑に人皇卅七代斉明天皇の夏鳥羽浦よりきく琉球の漂船八艘ありて十八人乗合せり廿日ばかりの漂流とぞ少○伊勢一志郡にやこ村あり

信濃にやこ井あり支考集に

みやけ　日本紀に官家又屯倉をよめり古事記に屯家とも屯宅とも云つ宮倉の義也内裏式に十一月奏御宅田稲數式にうて三宅田若干町とつゝえたりそれ御宅も三宅に同し諸國に田部と屯倉とを置しかまふへ景行天皇の時也屯倉八百年貢之穂稲年久而不蝕也西土の義倉社倉永久に不行○三宅も屯倉に同し氏姓所名よりふ官府の類也尾州のみやけ津嶋天王の本居あり國分寺を此に在くらふ○三宅嶋八北条早雲の領する所父嶋に近し武後に叙する者其後年歴くも帰つふふと大西風にあふに限りとあり又東へ行事幾百里と云事なり日本より東へ七百里も行しと思ふ朝日の桂をそふるといへ紺碧の層雲海の東よりうかびそて大陽海よりみて出日も大さ二十丈ばかりよりゆ大白星いまだ張てあるより其大さ傘のごく日の升る事おそく早し其寒極寒の時なれとも盛暑の如し人々衣を脱き頭上より物を置く暑を凌く計なり暫ありて日うらまへ次第に冷気うせ

成こと時節相應の寒氣也暫ありて風變て東よりの幸こと思ひ帆掛
よろこと西よ帰る始終廿日ほど歴こと臘月廿七日よ江戸よ着李白
詩よ所謂巴陵洞庭日本東こと云ふさる形り

みやま　日本紀よ大山をよくこと文選よ姑射ありの顕昭の深山をよむ
らつこと日本紀よ多く集よるこをみの真の名あれの意よ通せり

みやび　日本紀よ風姿又且閑雅ありなひ也古事記よ
曲の風俗をらふよ人振ありの万葉集よ遊士をよびことありの繪林
紀よ藻を訓せり文藻をらふ也伊勢物語よいちはやきみやびをもんこと
らつる是也

みやびと　宮人とよめり日本紀よ職員令よ婦人仕官者總号曰二
宮人一也よりて訓せり古語拾遺よ多くの人のおのよをおの
おのの手よりて万葉集よよめり宮の男よも通じ
○神のつかへ人神職の人をらふ古事記万葉集よも伊勢よもみ
らつる是也

みやつこ　日本紀よ國造をくだのみやつこ伴造をとものみやつこありて
造字の訛史よ新羅官十七等を舉こと中よ第十七よ造位こるよりたり
こともみやづかへより轉こる詩成こと或ひ御臣の字よて其國郡を治もる
こと其部屬を掌ることもらふ也

るひ顕昭説よ主殿寮の下部也こと御奴の義也今よ官奴司のつかひみやつこと
さとよめり

しのぎ　この字ものこぎりよりそこよりそこ庭よ出そ義こと九
漢音よ勢交者近勢尽而亡こと云ふの神のふるまひこと同の意こも又御奴の字よも住吉よ神奴氏のつかへ
くこと云ふ

みやのめ　拾芥抄よ宮呼五柱笠間廣前こるも姓氏録よ神
宮部造ありてそこよ宮能賣神よ仕ふる故よ姓氏録よ出こる造酒司坐神大宮賣
能賣神の大物主神を称こと姓氏録よ出こる造酒司坐神大宮賣
神社四座を亦思を致こと云ふこれの八神殿よ祭こる大宮賣と事代主の前よあれ

大己貴神ともや神皇實録ニ足産霊を大己貴神とそふ如〳〵○古語拾遺ニ今大宮賣神侍於御前是太玉命多志備所生神如今内侍者和君臣間令震襟悦懌也とこゆ此事ハ大殿祭ニらふ所と符節残合そる如〳〵

みやつこぶ　宇治拾遺ニとこゆ名簿の音轉也○命婦ハ女の位階ある也叙爵の宮女を内命婦ニ〳〵五位以上妻を外命婦ニ〳〵又狐神をらふと女官ふ准〳〵ふる名成〳〵稲荷社記ニ今命婦ある者白狐の害ニ遇〳〵伐たをけく秘名をあら〳〵ふる也とこゆ稲荷山ニ命婦のやふ〳〵あり○命婦ハ女の五位ふ也ふ中腸女房以上をハ總てらふべき事ニあらを中世以後中臈のそふ〳〵稱ふと称ふと叙爵の例の如〳〵○聽御前命婦裏帳命婦威儀命婦ハ内裡式ニ婦神人〳〵ふ

みやつこ　今家号を名字とふ呼ふものハ中古名田の字をとりて称ふる故也

苗字ニ出ハ非をとくいふり名田ハ東鑑ニよゝてりく史記平準書ニ出名字ハ安東郡ニ當波汰文ニ御田の名字丁部ハ其の名字ニよゝふ

ふ名号の名と亦姓氏を指ていふ也一説ニ延喜式ニ負名氏とふふ事ニよゝてふ也とくいふり又姓氏録ニ中臣斎連ニて更加名字一号志斐遠とこゝよゝふる家号を称ふり始めハ〳〵もふり○名字朝臣とらふハ四位の参議ニ限りて名の下ニ勅許ニよゝてふ也

みやびやう　神代紀ニ閑雅をよめりやふ取辞也みやびともふり或都字或ハ窈窕もよめり

みやめぐり　外宮儀式帳ニ宮廻神総二百餘前とゝよゝふを俗ニ外宮ハ四十末社内宮ハ八十末社とふふ何ふの時ふり初〳〵ふや記ふ遺ふる名をひろひてかくいふめる〳〵○俗間神社ニまゐりそく社を三度ふる事ニ〳〵ふ法華経ニ禮佛三匝をとあるよふふる成〳〵

○伊勢神宮ふそらふ末社めぐりの条也内外ふ中ニよゐてハまく遥拜所ふり

みやづかん　延喜式ニ名神とゝよゝふ文徳實録ニハ明神とゝよゝふ荘子の高明を揚雄ふ解嘲ニよゐ高名ニ作るふ如〳〵○明神の字ハ詩経ニ出ふり

○大明神の悲華経より出ずる○明神の号古く勅命よりの文徳実録
以近江國散久難度神列於明神の類の如く今妄に称するに僭せる也

みやいそ〳〵　大殿祭祝詞に宮進米進宮勤勤之米と云る宮進る
朝参とらひ宮勤の職掌をいふ

みやうでん　神鳳抄に諸國神戸御厨御園神田名田等と云る又飯高
郡に神戸名田ありて又立野名吹男名あり古く東鑑に伊勢駅家に
重安名田ありて又永平名松永名ふ古も多く名田出作と名目に
しるせる他に其田地ありて出作の註に名田也と云り
名ばかりの村もふきにやそは又別名にありて名をとかり呼ぶ豊前
ふるくは皆ありて今伊勢乗名郡に殿名といふ村あり是遺名也

みやびこぶり　古事記に此狡者宮人振也とも手弱初句よみやひこめく
ぶりなりて也

みやこのたつみ　喜撰うた山城の宇治也長明方丈
これもまさしくやはり伊勢の山なりとかや是に従りし

とよみしは伊勢度會郡内宮御鎮坐の地也徒然草に大神宮の遥拝に辰巳
にむかはせ給ふ南に向ひ給ふとぞ
△みゆき　万葉集に所見をとめの音第三の同韻にそれをうたひてとまれる
ゆきあひ也とらのうれと拾遺集に垣根の柳まことに中宮亮於令
ひろき松の葉にうもれてうるをとも葉集にも松をつまとよめり
をや〳〵○神社の探湯をもいふ録倉右大臣集にみゆたてうれ
そよ〳〵みこそそよ
みゆき　行幸をらひ御行也今上より行幸とらひ上皇に御幸とふ
○西宮記ふことのふらひをのふらひこそ
これを亭子院大井に御車行のよしみたまふも今にこそひのみゆきなる
のよし奏せんとて貞信公のよみたまふも今にこそひのみゆきなる
んといふ又北山抄に御行と出せる東鑑に御行と出せる音まそ
よむ事なるや○大雪をみゆきと仮傳に平地尺為大雪

こゝろえそうみハ大の義也こゝろもちよく行幸候ゟ○日本紀
ゟ御後をよめり身徃の義也

△みよ　神代紀ゟ候をよめり見ゟ外義也

みよしの　大和の芳野をゟ又ゟ吉野ゟ外也

大井川嵐山等の名所の後村上帝の行宮也ゟ又武藏國入間郡ゟ
かうゝ〳〵伊勢物語ゟ之川誠ゟ江

真熊野ゟも三熊野ゟもゟ外義也

△みらん　もゝそゝろんをよめるかゝる如〳〵

み同意成〳〵

△みる

△みら　見をよめりみえみゆるもゟ視觀察等ゟ同〳〵靈
異記ゟ矚又瞰をよめり○倭名抄ゟ海松をよめりふさみる
るぶさるもよめり鵜鶘菜也ゟ岩ゟ生てゟ色ゟ物ゟ其ゟ伊
勢物語ゟ法ゟおくれゟよめり○深海松万葉集ゟよめり延喜式諸國の
貢ゟと長海松深海松ゟり○源氏童女の名ゟみてあり海松ゟや○
万葉集ゟ布ゟきめのみるのゟゟえゟゟ海松の如くゟ破ゟ衣
ゟ

みるぶさ　幼女の髮ゟ海松ゟゟ如くゟきやうゟとゟ也

みるまさかり　神代紀ゟ顧眄之間ゟよめり見目眹の義也

△みる

△みろ　東國の俗足ゟくらふゟとかく小兒の事ゟゟみろくゟよ
詞盛衰記ゟゟゟ古事記ゟ美呂浪神ゟゟゟ

△みわ　三輪ゟ云ゟゟ三榮の説いとめ〳〵式大和城上郡大神大物主神
往也靈畤のゟゟく宮殿ゟゟ故實と存ゟ葛上郡大虎特神社ゟ三輪
明神ゟゟ拜殿鳥居のゟゟく同く故實あり一説ゟ曲玉幸魂奇魂の三の
玉の幸大巳貴神の故事ゟ出ゟれハかく名くゟゟとゟ
ゟつの輪ハ清くきよき心をかゝ長らゟくありの意ゟゟ
代予ハ語ゟゟゟ金剛經ゟ無所徃來亦無所去故名如來の意とりてよめ

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用

ゐて江談抄に玄賓律師自洛陽赴他國間道來會女人脱衣奉之得
レ之
三輪川の渚のきよけかるべくもあらぬ那智のたきつ
瀧もまさしく宇也三輪より十四五町北に檜原のみあり檜原明神
と云ふ神社とあり両山の間玄賓谷〳〵僧都の庵の跡あり○神字成
みとよめる書日本紀古事記万葉集所〻ことごとく神名式城上郡よ
神坐日向神社は三輪山巓にあり延喜式日向皇子に作る大和神実のこ
と大己貴神と多かるときはおもふよめるや古事記に大己貴神の事にこよりて
る五首の歌を指て謂を神語也とこゝろえ〳〵大己貴神の巳魂
をこゝに留めたまふをいふかゝる人あれど西土にも生祠にり人の祀ること
已祠ることは実のごとくて生前に祀るは同じからず○神酒とりも書日本紀万
葉集にこゝろ私記に神酒和語云美和といふ三輪の神は酒神なること
と古き也に其記多く土左風土記には其國の三輪川のみをあげて神酒
醸せしよりの名ぞといふも堅第に移と明るを亦三輪よりさかえ又移は

酒よろづよせいふ須徳院御製
入日さす杉の立枝に木綿かけてみるもの里人
○神酒と供ふるをもみるといふ万葉集に哭澤之神社に三輪すゑ
ともめる見也しかれどもいつも同物成ればみてぐら
伊勢物語にも真名本に御行とあり女御多賀幾子ら也
ひてのちみそぎ安祥寺にてきりおこなひの
事也次の條に七七日の御ぞきとこゝろえ安祥寺は山城岩治郡御陵村にあり
△みわ　御井とよめり山御井は天智紀にこゝろえ今は三井寺の地名也
本御井ともいふと三井と改めしは元亨釈書に見えたり山を御井多架
集にこゝろえ伊勢にあり五十師御井ともいふ窟堤の御井は貞観式に
も敦賀御井は光仁紀にこゝろえ城下郡藏堂村にあり大井戸の名は東大寺の
轟谷軸にこゝろえて藤原の御井は万葉集にこゝろえて殊に井の字成称美しそよ
めるはいふにや遂に藤井原の略語成○伊勢度會郡上御
井社は藤岡山の麓に在て天村雲命とあり康治中臣寿詞にこゝろ郎天

837
34
48

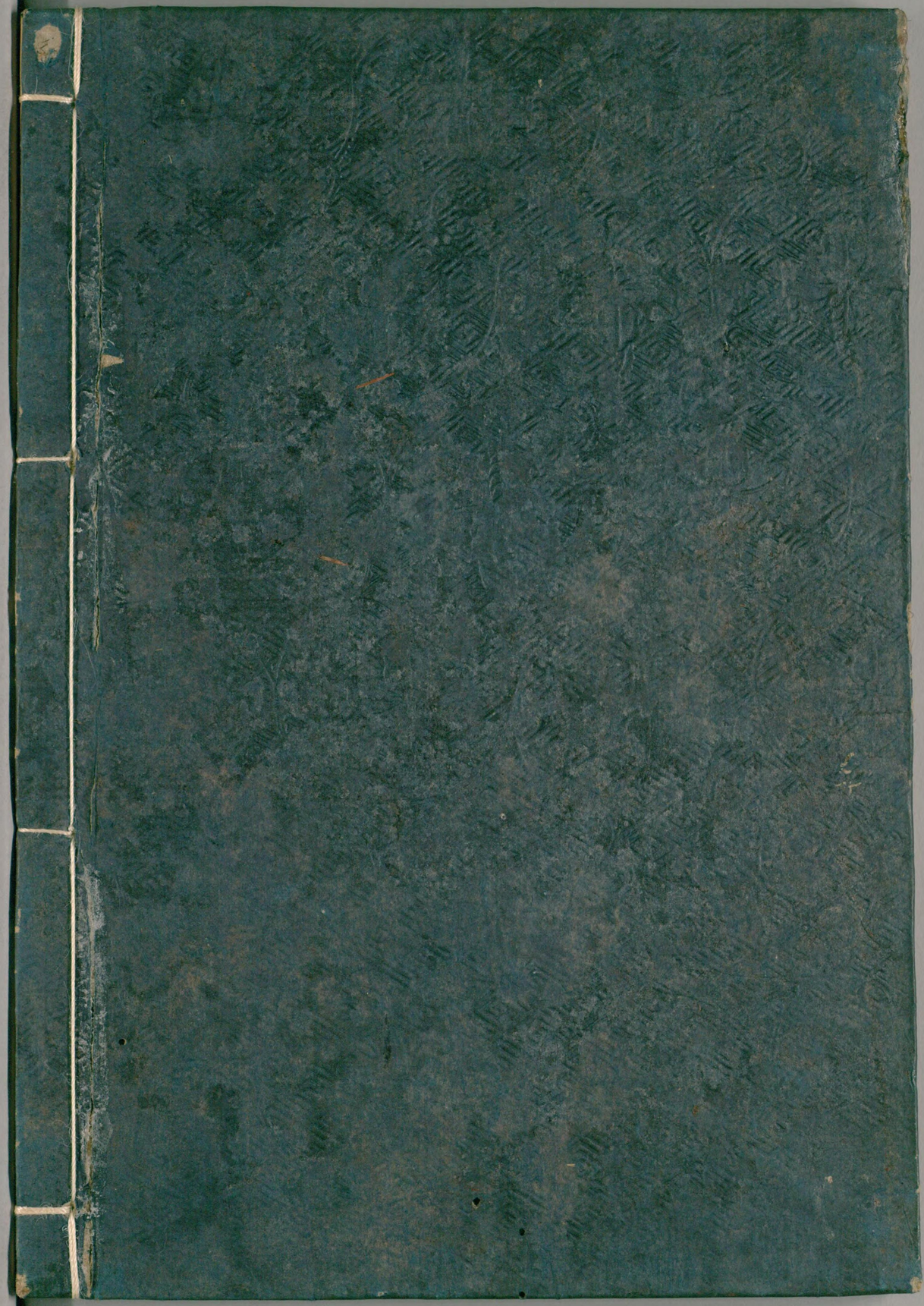
忍穂井也とこしへ下御井ハ高宮の麓ニ坐り別宮の御饌を炊ぐに用う
石井神社ハ内宮の名社岩井田山ニあり○御井神社ハ出雲秋鹿(アイカノ)郡出雲
郡大和宇陀郡美濃多藝郡各務(カヽミノ)郡ふたよゐ座摩(イカスリノ)御巫(ミカンナギノ)祭神生井神
社福井(サカ)神綱長(ナガ)井神ふたゐ臨時祭式ニ御井祭あり御井神ハ大巳貴ノ
神の子也古事記ニみえ

△みそ

△みそ　水押の煮もの又みそしるとらひしこと
しるし或ハ醯頭ニもと称ふ舟の製ニしるきの処也
みそこと　万葉集ニ御面とよめり又面輪とよめり又面輪
とよめり面輪ハ梵書ニこそしるし
みそのうみ　それニよりハ多く加茂の明神とさとり○日本紀ニ皇祖
とみおやとよめり古事記ニ御母(ミおや)祖とさり鴨之御祖(ミおや)也とり即御母也
父母と凡ておやとらひ借言也

倭訓栞前編三十終

国立国会図書館　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『和訓栞』　請求記号 837-48

ガラス使用